

社会と対話・協働する人類学：その可能性と役割

第14回人類学関連学会協議会合同シンポジウム趣旨説明

亀井伸孝（愛知県立大学／日本文化人類学会）

人類学関連学会協議会（CARA）は、日本人類学会、日本生理人類学会、日本文化人類学会、日本民俗学会、日本靈長類学会（五十音順）の5学会から構成される組織である。2006年11月に、高知工科大学を会場とする第60回日本人類学会研究大会に合わせて第1回シンポジウムが開催されて以来、5学会の持ち回りで、年1回の合同シンポジウムを開催してきている（注1）。

通常は各専門分野の諸課題にそれぞれの手法で取り組んでいる5学会が、合同シンポジウムで分野の壁を越えた対話をを行うことにより、「人類」それ自身を研究対象とするという大きな視点に基づいて、成果の共有と発信に努めてきた。

従来の合同シンポジウムでは、おもに研究の「成果」を持ち寄ることを念頭に、共通論題を設定し、人類に関する何らかの共通理解を試みるというスタイルの開催が多かった（注2）。それらは多くの実りをもたらしてきたが、今回は初めて「社会との対話・協働」という趣旨で開催する運びとなった。今回のテーマ設定のねらいは、以下のような現状認識に基づいている。

今日、学問が社会に開かれた営みであるべきだとの要請が次第に強まってきている。政策としても、また、市民からの期待としても、専門家が研究成果の蓄積と当該分野を継承する研究者育成教育のみに専念するのではなく、研究協力者とよりよい関係を作り、一般社会に向けて成果を公開し、また、その知見を社会のさまざまな場面で多様な用途に活用するといった関与が求められる時代となっている。

こうした動きの中、学問・研究者による社会への関与それ自体の是非をめぐる議論から、具体的な関わりの方法、対象、程度、役割などをめぐるさまざまな提言・実践報告まで、多くの対話が生まれてきている。個々人における賛否はともあれ、学問は、否応なく社会との関わり方をめぐって何らかの自己提示を必要とする状況になっていると言えるであろう。

「人間」それ自身への包括的な理解を目指す人類学関連の諸学が、どのような形でその理解を社会と共有し、どのような社会の公共性を支えていくかとするかという問題群は、これからの市民社会を展望し、共に構築していくアクターのひとつとして、重要な課題であると考えられる。

学問による社会との対話・協働の分野・方向性は、政策、教育・啓発、メディア、ボランティア、市民運動など多岐にわたるであろうが、今回はあえて分野を特定せず、各登壇者が自由に実践事例を持ち寄ることとした。その結果、大きく分類して、環境をテーマとした地域社会との関わり（日本民俗学会・岸本誠司氏、日本靈長類学会・鈴木克哉氏）、モノづくり・デザイン（日本生理人類学会・岡田明氏）、中等教育への関与・提言（日本文化人類学会・濱雄亮氏、日本人類学会・市石博氏）といった分野の実践事例報告が集まることとなった。

人類学関係の諸学がいかに社会に向き合い、成果を共有し、協働の試みを重ねてきているか。学会や関連グループ、研究者個人などが取り組んでいる具体的な活動事例を提示し合うとともに、その理念、目的、手法や効果などを相互に学び合うことを通じて、学問と社会の接点のこれから姿を構想する機会としたい。

（注1）人類学関連学会協議会の過去の開催に関するすべての記録を、日本文化人類学会のウェブサイトで閲覧することができる（日本文化人類学会, online）。

（注2）各回のテーマ一覧（日本文化人類学会, online）。

第1回（2006）「人類史から人類の将来を展望する」

第2回（2007）「人間＝ヒトの謎をめぐって」

第3回（2008）「ヒトの適応を巡って」

第4回（2009）「飽くなき食への希求をめぐって」

第5回（2010）「加齢：老いの生態をめぐって」

第6回（2011）「島：離島の生態をめぐって」

第7回（2012）「人間性の由来を探る：靈長類学から総合人間学へ」

第8回（2013）「人類の姿勢とロコモーション様式の特徴」

第9回（2014）「ヒトがヒトであるゆえん：学習能力の進化をめぐって」

第10回（2015）「群れる・集う：人間社会の原点を問う」

第11回（2016）「生：誕生」

第12回（2017）「人、自然、テクノロジーの共生に向けて：人類学の挑戦」

第13回（2018）「眠りの人類学：人は夜をどのように過ごしてきたか」

日本文化人類学会「人類学関連学会協議会合同シンポジウム」http://www.jasca.org/related_assocs/（2019年2月28日閲覧）

キーワード：人類学関連学会協議会、成果の活用、社会との対話・協働、公共性